

第3章

在學生調査への回答傾向と GPA¹の学科内順位との関連

1. 分析の目的

在學生調査は、学生一人一人が毎年度の活動や成長を振り返る機会を提供することを主たる目的としているが、大学にとっては、教育の内部質保証サイクルを機能させる議論のための貴重なデータを得られる機会でもある。本調査の結果については、過去2年間で、一歩踏み込んだ分析を行ってきた。平成29(2017)年度実施分では、様々な活動への取り組み意欲の程度によって回答を類型化し、この類型による学び方や学修実感等の違いを確認した²。平成30(2018)年度実施分では、平成30年度の期間 GPA との関連性を検討し、GPA 上位群と下位群を比較したところ、学び方の一部や外国語科目・専門科目に対する意欲、専門知識の学修実感の回答値が上位群で高いことが分かった³。

令和元(2019)年度は、本調査が在学生の1年間の振り返りとなること、また本学の教育改善に活かすこと、の二つの目的に照らしつつ質問項目数を削減し、回答率の向上を図った。結果として、平成30年度まで全学科の回答が揃わなかった4年生(卒業時)より全学科の回答が得られ、回答者数も1年生と同程度となった。学科別の検討ができるほどの件数ではないが、本年度は1年生と4年生の比較を中心に、在學生調査の回答傾向と GPA との関連性をみていく。ただし、ここで検討されるのはあくまで令和元年度の1年生と4年生の結果であり、同一人物の4年間の変化ではないことに留意されたい。

¹ GPA(Grade Point Average)…各科目の成績評価に一定の Grade Point (S:100~90点、A:89~80点...等)を与え、その累積の平均値を示すもの。一般に留学や奨学生の推薦要件などに用いられる。詳細は履修要覧 (https://www.univ.gakushuin.ac.jp/life/post_11.htm) を参照。

² https://www.univ.gakushuin.ac.jp/about/enq_students_2017-2.pdf

³ https://www.univ.gakushuin.ac.jp/about/enq_students_2018-2.pdf

2. 在学生調査と GPA の連結

前年度の報告書では、回答者内での GPA の比較により、上位群と下位群の違いを検討した。本年度は1年生・4年生の双方について、全学生を対象に学科ごとに GPA の上位群（25%）、下位群（25%）、残りを中位群として分け、これをもとに回答者の特徴を検討することとした。前年度調査で比較的 GPA の高い学生が多く回答していると分かったこと、また学科ごとにカリキュラムが異なることから、この方法によって前年度より実質的な群分けを可能とした。

表 2-1 学年・GPA の群別の各種時間等の平均値

※0時間は平均値の計算に含めていない。

	1 年生				4 年生			
	1.GPA 上位群	2.GPA 中位群	3.GPA 下位群	全体	1.GPA 上位群	2.GPA 中位群	3.GPA 下位群	全体
人数	154	163	45	362	94	142	42	278
GPA（通算）	3.31	2.64	1.68	2.81	3.18	2.49	1.64	2.59
通算登録単位数（教職等を含む）	49.03	49.79	47.44	49.20	140.53	148.94	165.79	148.63
通算修得単位数（教職等を含む）	48.63	48.14	35.78	47.06	138.40	136.72	129.89	136.29
出席時間	22.20	24.21	18.74	22.72	6.50	7.23	8.75	7.19
授業外の自学自習時間	12.90	12.72	12.65	12.79	11.00	13.71	7.07	11.88
課外活動時間	7.51	9.11	10.75	8.57	9.78	14.24	16.37	13.42
個人学習時間（資格のための学習や読書）	6.48	5.98	7.74	6.38	5.68	9.04	5.45	7.40
アルバイト時間	10.64	11.73	12.61	11.36	12.62	16.32	16.13	15.11
交友・趣味・娯楽	11.65	10.07	15.46	11.35	13.35	14.12	13.47	13.78
大学への通学時間	10.95	11.75	10.72	11.28	6.52	7.53	12.43	7.91
私的な生活時間	23.07	21.32	23.54	22.35	21.88	23.04	16.22	21.67
睡眠時間	44.18	42.60	44.44	43.51	46.84	46.95	41.36	46.15

表 2-1 に、主要な値の平均を群ごとに示した。回答者の人数構成は、1年生で上位群 42.5%、中位群 45.0%、下位群 12.4%、4年生で上位群 33.8%、中位群 51.1%、下位群 15.1%となっており、両学年とも上位群の回答者が多く下位群が少ない結果であった。したがって、やはり前年度と同様に GPA の比較的高い学生の方が多く回答したことがうかがえる。

通算登録単位数は、1年生では GPA の群による差はみられなかったが、4年生では下位群が他 2 群と比較して多かった。また、通算修得単位数は、1年生では下位群が他 2 群と比較して少なく、4年生では差はみられなかった。このことから、下位群は履修登録自体は多いものの、修得しなかった単位が比較的多い（平均で1年生は12単位程度、4年生は通算35単位程度）群であることが分かる。

その他の時間に関する項目で差がみられたのは、1年生の出席時間で下位群が短く、4年生の通学時間が下位群で長く、睡眠時間が下位群で短かった。したがって、1年生の下位群は授業にあまり出席しておらず、このことがGPAの低い要因として考えられる。また、4年生の下位群は、4年次時点においても履修登録科目が多いことから大学に登校する日数が多く通学時間が長くなっていると考えられる。その他の項目では差がみられなかったため、授業外学習時間や課外活動・アルバイト等への時間の使い方とGPAの間には連動性があるとは言えなかった。

また、授業外学習時間の平均は、1年生で12.79時間、4年生で11.88時間であった。本設問の各項目を一部変更したため、前年度との比較は難しいが、前年度と同様に自学自習の充足率⁴を算出すると、1年生で28.2% ($12.80 \div (22.72 \times 2)$)、82.6% ($11.88 \div (7.19 \times 2)$)となった。4年生では授業への出席時間に比較して授業外学習時間が長い傾向がみられるが、1年生の自学自習の充足率は前年同様に高いとは言えない結果であった。

⁴ 参考：<https://crdeg5.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/ir16kyo2.html>

3. GPA のグループによる回答内容の違い

ここからは、Q1 から Q4 の回答について、学年ごとに GPA の群を独立変数とした 1 要因の分散分析を行った結果をもとに、GPA 上位群と下位群との回答傾向の違いを検討していく。

3-1. GPA の高低と学び方

本調査の Q1 では、1 年間の学び方について 10 項目に分け、4.とてもあてはまる～1.全くあてはまらない の 4 件法で訊ねている。これらの各項目で、GPA の上位・下位によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

図 3-1 学年・GPA の群別の学び方に関する項目への回答平均値

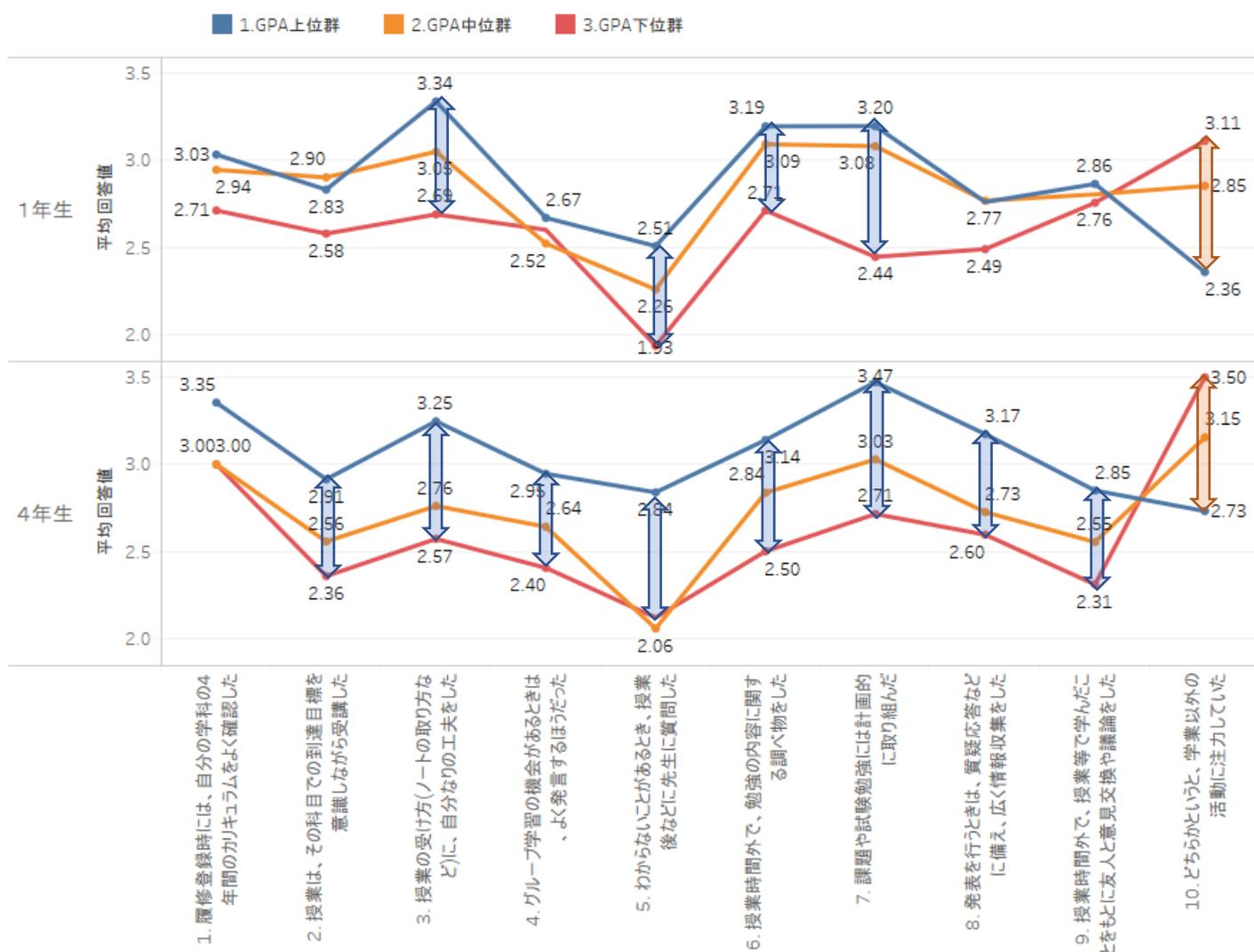


図 3-1 では、GPA 上位群と下位群で差が検出された箇所を矢印で示している。1 年生では、3.「授業の受け方（ノートの取り方など）に、自分なりの工夫をした」、5.「わからない

いことがあるとき、授業後などに先生に質問した」、6.「授業時間外で、勉強の内容に関する調べ物をした」、7.「課題や試験勉強には計画的に取り組んだ」の4つで差がみられ、それぞれ上位群の平均値が高かった。10.「どちらかという、学業以外の活動に注力していた」にも差が検出されたが、逆に下位群で平均値が高い結果であった。4年生では、1.を除くすべての項目で差がみられ、2.~9.で上位群が高く、10.では1年生と同様に下位群が高かった。

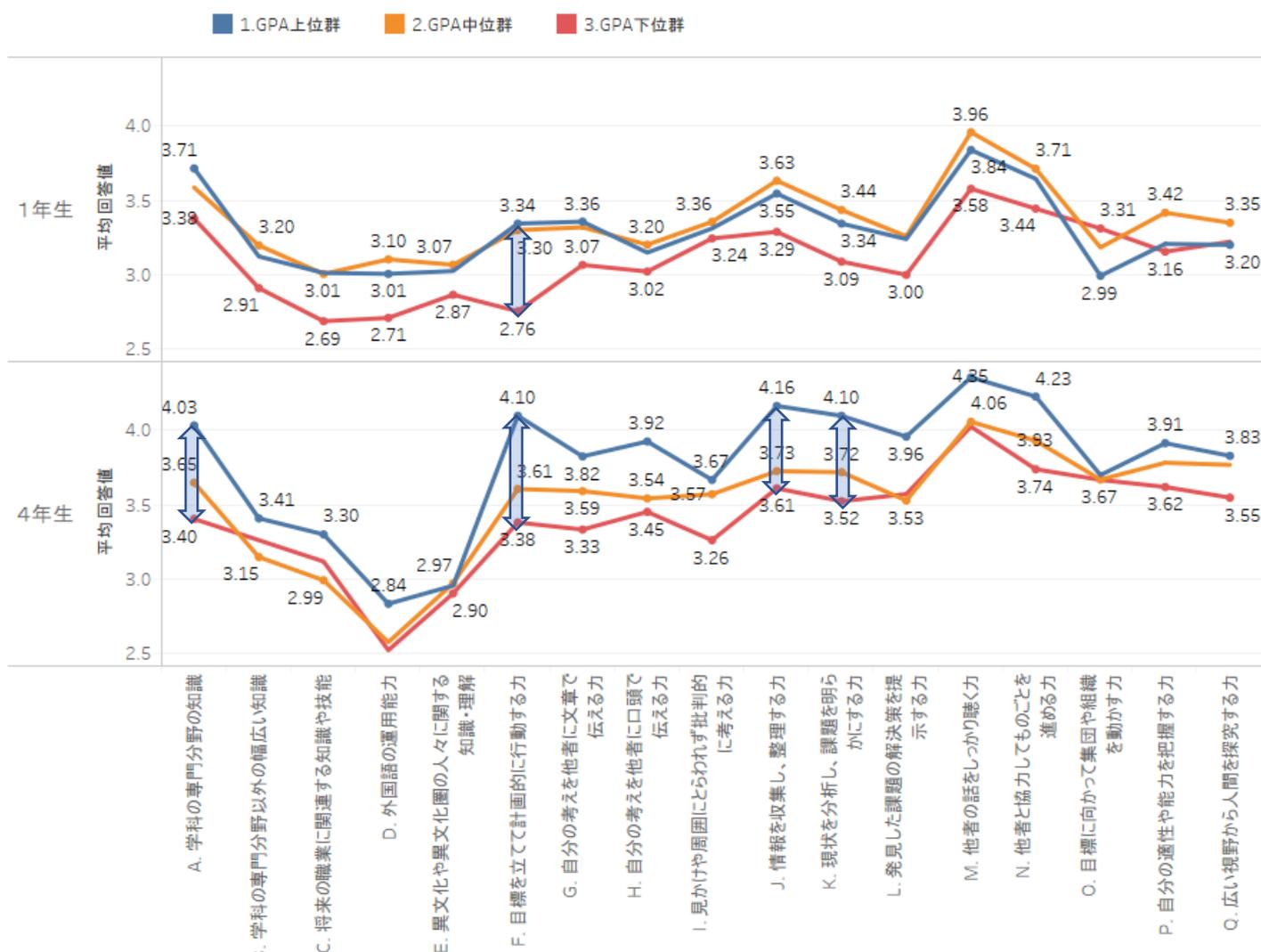
このように、1年生では、GPAの高い学生は、自分なりの受講の工夫、教員への質問、授業外での調べ物、課題や試験への計画性について比較的意識的に取り組んでいたことが分かった。また、4年生では、加えてその他の学び方でも下位群との違いがあった。特に4年生では、卒業論文・ゼミ研究をはじめとして複合的な学習成果のアウトプットが求められることが、差の出た項目の多さと関係している可能性が考えられる。

また、どちらの学年でも、GPA下位群は主に学業以外の活動に注力していたと回答している傾向があった。このことから、力の入れ方が学業以外の事柄に偏るとGPAも低くなりがちであるという当然の結果を確認できるものの、課外活動やその他の活動に取り組む場合でも、学業が疎かにならないようバランスを意識することで高い成績の維持が可能であることも同時に示唆していると思われる。

3-2. GPA の高低と知識・能力の学修実感

本調査の Q2 では、知識・能力の身についた実感度合いについて 17 項目に分け、5.しっ
かり身についた～1.全く身につかなかった の 5 件法で訊ねている。これらの各項目で、
GPA の上位・下位によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

図 3-2 学年・GPA の群別の知識・能力の学修実感項目への回答平均値



GPA 上位群と下位群で差が検出されたのは、1 年生では、F. 「目標を立てて計画的に行動する力」のみであった。4 年生では、A. 「学科の専門分野の知識」、F. 「目標を立てて計画的に行動する力」、J. 「情報を収集し、整理する力」、K. 「現状を分析し、課題を明らかにする力」で差がみられ、いずれも上位群の方が高かった。

身についた知識・能力の実感は、1年生ではまだ自信がついていないためか、GPAが高くても差が表れるほど自己評価が高まる項目は少ない。4年生では、専門分野の知識をはじめとして自己評価に差がある項目がいくつか見受けられた。

教員からの評価の集大成といえる GPA と連動して高い自己評価が得られる知識・能力としては、専門分野の知識や情報収集・整理能力、現状分析と課題発見の能力がある。これらの知識・能力は、本学での4年間の学びの中で伸長している実感が得やすいものである可能性があり、GPAが上位の学生はこれらについて比較的自信をもって卒業していったことが想像できる。

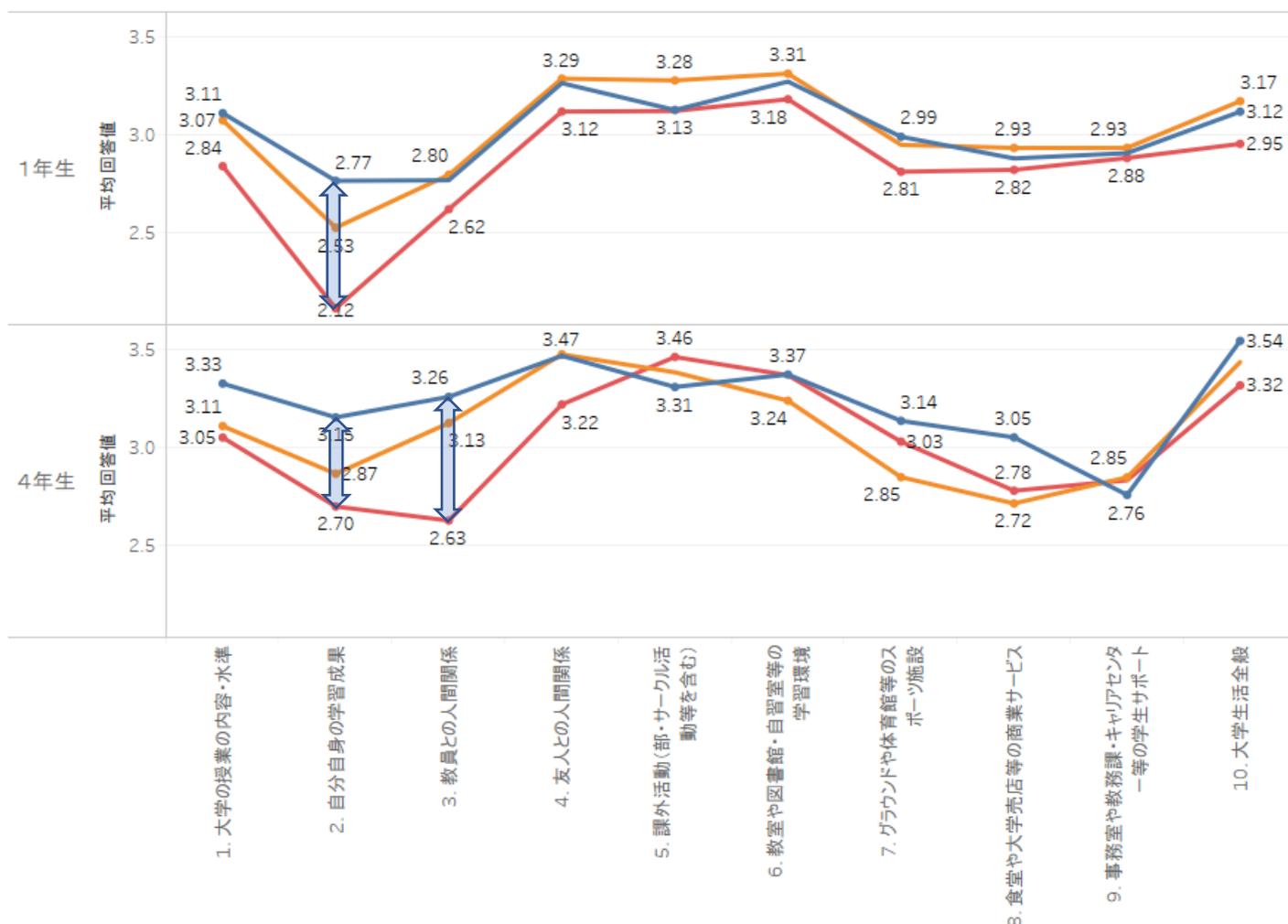
3-3. GPA の高低と大学生活への満足度

本調査の Q3 では、1 年間の大学生活への満足度について 10 項目に分け、4.とても満足している～1.全く満足していない、0.判断できるほど体験しなかった の 5 件法で訊ねている。これらの各項目で、GPA の上位・下位によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

図 3-3 学年・GPA の群別の大学生活への満足度項目への回答平均値

※「0.判断できるほど体験しなかった」は平均値の計算に含めていない。

■ 1.GPA上位群 ■ 2.GPA中位群 ■ 3.GPA下位群



GPA 上位群と下位群で差が検出されたのは、1 年生では、2.「自分自身の学習成果」のみだった。4 年生では、2.の他に 3.「教員との人間関係」でも差がみられ、上位群の方が平均値が高かった。両学年で自分自身の学習成果と GPA の連動がみられたのは当然の結果といえるだろう。

4 年生の GPA 上位群では教員との人間関係への満足度が高かった点について、3-1.で述べた学び方の設問において上位群は教員への質問を比較的よく行っていたことを併せて考

えると、教員に分からないことを質問して指導を受けるという行為は大学での学びの中心とも言え、教員との人間関係の満足度を高める要因のひとつになっている可能性が考えられる。

この設問では、上位群と下位群の差が検出されない項目が多かった。

下位群は上位群よりも主に学業以外の活動に注力していたと自覚している群だが、課外活動をほぼ体験しなかったと回答した割合（表 3-3）は、どの群でも大きな違いはみられなかった。

課外活動を行っていた学生はどの群にも一定程度含まれており、課外活動の満足度に違いがみられなかったということは、満足感が得られるくらい課外活動を行いつつ、同時に学業においても好成績を修めることは本人の取り組み方次第で可能であると示唆しているといえるだろう。

10.「大学生生活全般」の満足度についても群間の差は検出されなかったため、GPA と大学生生活への満足度は関連しておらず、それぞれが何らかの満足感をもって卒業していった様子がうかがえる。

表 3-3 「0.判断できるほど体験しなかった」と回答した学生の割合

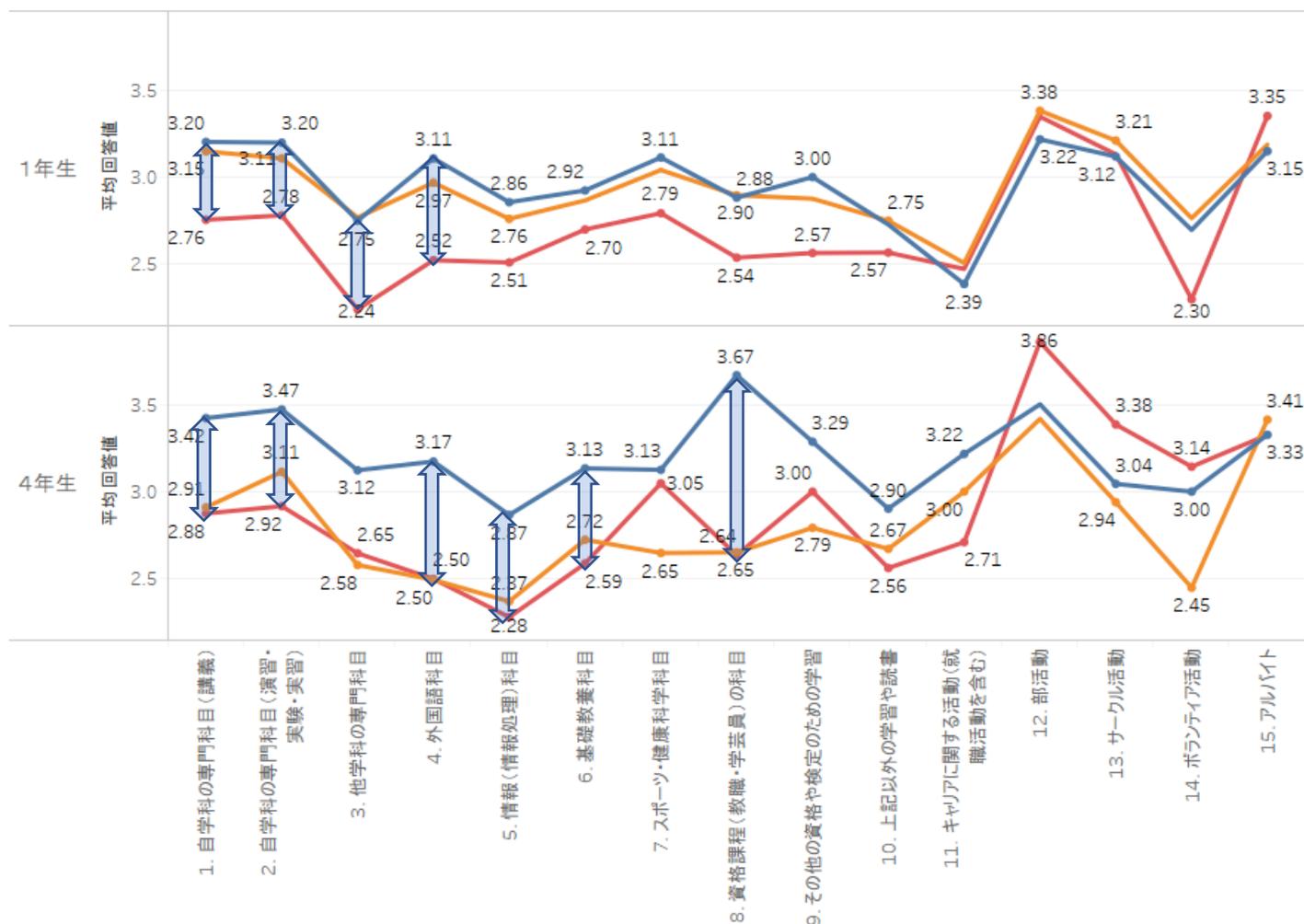
学年	項目内容	1.GPA上位群	2.GPA中位群	3.GPA下位群
4 年生	1.大学の授業の内容・水準	1.1%	3.5%	7.1%
	2.自分自身の学習成果	1.1%	4.3%	4.8%
	3.教員との人間関係	2.2%	9.9%	16.7%
	4.友人との人間関係	1.1%	2.1%	2.4%
	5.課外活動（部・サークル活 動 等を含む）	12.9%	15.5%	7.1%
	6.教室や図書館・自習室等の 学 習環境	7.5%	5.6%	9.5%
	7.グラウンドや体育館等のス ポ ーツ施設	52.2%	34.0%	21.4%
	8.食堂や大学売店等の商業サービス	17.2%	12.8%	2.4%
	9.事務室や教務課・キャリアセンタ 等 の学生サポート	10.8%	16.2%	14.3%
	10.大学生生活全般	1.1%	1.4%	2.4%
1 年生	1.大学の授業の内容・水準	0.0%	0.6%	2.2%
	2.自分自身の学習成果	0.0%	0.0%	4.4%
	3.教員との人間関係	15.6%	15.3%	17.8%
	4.友人との人間関係	3.9%	3.7%	6.7%
	5.課外活動（部・サークル活 動 等を含む）	13.0%	16.0%	8.9%
	6.教室や図書館・自習室等の 学 習環境	2.0%	3.1%	2.2%
	7.グラウンドや体育館等のス ポ ーツ施設	30.5%	27.0%	28.9%
	8.食堂や大学売店等の商業サービス	7.8%	7.4%	0.0%
	9.事務室や教務課・キャリアセンタ 等 の学生サポート	29.9%	25.2%	24.4%
	10.大学生生活全般	1.3%	0.0%	2.2%

3-4. GPA の高低と授業科目・学習・課外活動等への意欲

本調査の Q4 では、各種の授業科目や学習、課外活動等への意欲について 15 項目に分け、4.とても意欲的だった～1.全く意欲的でなかった、0.経験しなかった の 5 件法で尋ねている。これらの各項目で、GPA の上位・下位によって回答傾向に違いがみられるかを検討した。

図 3-4 学年・GPA の群別の授業科目・学習・課外活動等の意欲項目への回答平均値

※「0.経験しなかった」は平均値の計算に含めていない。
 ■ 1.GPA上位群 ■ 2.GPA中位群 ■ 3.GPA下位群



GPA 上位群と下位群で差が検出されたのは、1 年生では 1.「自学科の専門科目(講義)」、2.「自学科の専門科目(演習・実験・実習)」、3.「他学科の専門科目」と 4.「外国語科目」であった。4 年生では、3.では差が検出されなかったが、1.・2.・4.では 1 年生と同様に差がみられ、その他では 5.「情報(情報処理)科目」、6.「基礎教養科目」、8.「資格課程(教職・学芸員)科目」でも上位群の平均値が高かった。経験しなかったと回答し

た人数割合にはどの項目も大きな偏りがみられなかった（表 3-4）ため、GPA 上位群は専門科目以外にも多様な科目に対する意欲を高く持っていたといえる。

表 3-4 「0.経験しなかった」と回答した学生の割合

学年	項目内容	1.GPA上位群	2.GPA中位群	3.GPA下位群
4 年生	1. 自学科の専門科目（講義）	18.3%	13.5%	4.8%
	2. 自学科の専門科目（演習・実験・実習）	8.6%	6.4%	14.3%
	3. 他学科の専門科目	47.3%	29.1%	19.1%
	4. 外国語科目	37.6%	28.4%	28.6%
	5. 情報（情報処理）科目	35.5%	25.5%	23.8%
	6. 基礎教養科目	35.5%	22.7%	19.1%
	7. スポーツ・健康科学科目	65.6%	47.5%	50.0%
	8. 資格課程（教職・学芸員）の科目	73.9%	67.4%	73.8%
	9. その他の資格や検定のための学習	39.1%	38.3%	42.9%
	10. 上記以外の学習や読書	11.8%	13.5%	23.8%
	11. キャリアに関する活動（就職活動を含む）	5.4%	5.8%	9.5%
	12. 部活動	65.6%	48.9%	50.0%
	13. サークル活動	51.6%	52.9%	69.1%
	14. ボランティア活動	76.3%	71.4%	83.3%
	15. アルバイト	7.5%	7.1%	4.8%
1 年生	1. 自学科の専門科目（講義）	0.0%	0.0%	0.0%
	2. 自学科の専門科目（演習・実験・実習）	4.6%	3.1%	8.9%
	3. 他学科の専門科目	39.9%	33.3%	26.7%
	4. 外国語科目	8.5%	3.1%	6.7%
	5. 情報（情報処理）科目	0.7%	0.0%	0.0%
	6. 基礎教養科目	14.9%	12.9%	9.1%
	7. スポーツ・健康科学科目	42.2%	38.9%	35.6%
	8. 資格課程（教職・学芸員）の科目	77.9%	70.0%	71.1%
	9. その他の資格や検定のための学習	32.5%	40.5%	48.9%
	10. 上記以外の学習や読書	18.8%	16.6%	17.8%
	11. キャリアに関する活動（就職活動を含む）	59.7%	59.9%	56.8%
	12. 部活動	52.0%	51.5%	42.2%
	13. サークル活動	44.8%	47.2%	48.9%
	14. ボランティア活動	78.4%	79.0%	77.8%
	15. アルバイト	16.9%	11.0%	11.1%

また、どちらの学年も、11.「キャリアに関する活動」や、12.以降の各種の課外活動等（14.「ボランティア活動」は群によって経験した人数が極端に少ないため注意が必要）、GPA 上位群と下位群の差はみられなかった。このことから、課外活動等への意欲と GPA の高低とは関わりがないことが分かる。課外活動は学業の阻害要因として捉えられること

もあるが、本学においては、何らかの課外活動に意欲的に取り組むことは、必ずしも学業への意欲を保って高い成績を修めることを直接に妨げてはいない状況であると思われる。

4. まとめ

以上、回答した学生を各学科内の GPA の順位によりグループ分けし、各質問項目の回答傾向の違いについてみてきた。

まず1年生では、GPA 上位群は授業の受け方を工夫し、教員へ質問をし、授業外での調べ物もして、課題等へは計画的に取り組むなど、主体的な学習習慣が身につけている様子がうかがえた。また、主要な授業科目に対する意欲も高く回答する傾向がみられた。授業外での自学自習の時間には GPA 下位群との違いはみられなかったが、GPA 上位群は下位群に比べて自分自身の学習成果に満足が得られている傾向があり、同時に、目標を立てて計画的に行動する力が身についた実感を得ていた。

学業以外の課外活動等への体験率（表 3-3）や意欲（図 3-4）には GPA の上位・下位による違いはみられなかったが、GPA 下位群は「学業以外の活動に注力していた」と自認する傾向が強くみられた。このことから、課外活動等に取り組むことが直接的に GPA に影響を及ぼすわけではなく、大学生生活のバランスの取り方や計画性、学業への意欲をどう維持するかによるところが大きいことがうかがえる。

対して4年生では、GPA 上位群は学び方のほとんどの項目に下位群より高く回答しており、また、主要科目だけでなく、外国語・情報・基礎教養や資格課程の科目にも意欲的であった。結果として、自分自身の学習成果の他に、教員との人間関係についても満足度が高かった。知識・能力では、専門分野の知識、目標を立てて計画的に行動する力、情報を収集し整理する力、現状を分析し課題を明らかにする力で下位群よりも高く身についた実感を得ていた。

学業以外の課外活動等への取り組み方については1年生の結果と同様であり、GPA 上位群では課外活動への意欲が高くて、その活動に偏ることなく学業とのバランスを取り、学習成果と課外活動の双方で満足を得られていることが確認できた。

これらのことから、大学生生活を通じて、学業を含めた各種の活動にバランスが取れるよう計画的に取り組む、様々な学び方を自分なりに工夫することで、高い学業成績と自己の能力に対する自信をもって卒業していくことができることが示唆された。

述べてきたように、本年度は回答数が増加したことによって、4年生の卒業時点の回答に関する詳細な分析が可能になった。GPA 上位群と下位群の間の差に1年生と相通ずる点も見出され、学習への主体性・計画性や、目標を立てて計画的に行動する力の身についた実感での差の出方は両学年に共通していた。また4年生では、GPA 上位群は外国語・情報・基礎教養や資格課程の科目にも下位群より高い意欲で取り組んでおり、卒業年次において幅広い分野へ意欲をもって学んでいる様子がうかがえた。

俯瞰すると、GPA 上位群の下位群と異なる点は、ひとつは主体的な学習習慣が身につけていること、もうひとつは自分なりの目標設定や到達イメージが持っており、自らそれに向けた大学生生活のバランスの取り方、計画的な過ごし方を構築できていることであるとい

えよう。この両面から学生への支援ができれば、学業への取り組みや意欲の維持、その先の GPA 向上や知識・能力への自信に資することができるかもしれない。

具体的には、

- ・ラーニング・サポートセンターや各部門の初年次教育における「学び方」支援の強化
 - ・自分なりの目標を持つための広義のキャリア教育や目標管理の仕組み
 - ・各科目の到達目標や、各回の授業のめあての提示
 - ・ディプロマ・ポリシーで目指す人材像の共有及び各科目との結びつきの明確化
- などが挙げられるだろう。

本調査では、引き続き回答率改善の努力をしながら、大学や社会の変化とともに学生にどのような変化がみられるかを経時的に捉え、本学の内部質保証サイクルを支援できるような活動を継続していきたい。